

## 組仏仕・9月例会

9月16日、正光寺（井上晃陽住職）において、組仏仕の9月例会が開かれた。37名の参加者は桑門真昭師（大谷派擬講・常念寺住職）の「空廻（くうごう）の沢をゆく者」と題した法話を聴聞して研鑽を深めた。

### 《法話》

二河白道（二河譬）は、もともとは『涅槃経』にでてくる話である。七高僧の曇鸞が著書のなかで「一心」を解説するためのたとえとして用いた。

第三祖の曇鸞と第四祖の道綽のあいだには100年の間があいている。道綽の面授の弟子が第五祖の善導である。

善導は二河譬に出てくる川の様子をつぶさに説いた。二河譬の話のつづきを書いたのである。

二河譬で、行者が白い道を渡っていくという場面は、二河譬の最後のシーンにあたる。「赤穂浪士」なら四十七士の切腹の場面、「水戸黄門」なら印籠が登場する場面である。講題の「空廻（くうごう）の沢」は、有名な場面のひとつ前のシーンになる。

二河譬を辞書の解説風に説明すると次のようになる。

——浄土往生を願う者が迷いの世界から極楽に至る道筋を、水・火の二河をもとに説き明かしたたとえ。唐の善導（613-681）が『観経疏（かんぎょうしよ）』散善義（さんぜんぎ）

で記述したのによる。人が西に向かって行くと、南に火の河、北に水の河があり、その中間に4、5寸（約12～15センチ）の白道があって、水火が猛然と押し寄せ、後方からは群賊や悪獣が迫ってくる。進退窮まり、白道を渡ろうかと思案していると、東岸から早く渡れ、死の災いはないという声、西岸からかならず守るからという声に励まされ、信じて西岸に達した。火の河は人間の瞋（いか）りや憎しみ、水の河は愛着や欲望、白道は浄土往生を願う清浄心、群賊たちは人間の迷いから生ずる悪い考えなど、東岸の声は娑婆世界の積尊の教え、西岸の声は極楽浄土の阿弥陀仏の呼び声に例えたもの。日本では絵解きとして広く知られた。美術的遺品では、鎌倉時代の制作になる京都・光明寺、兵庫・香雪（こうせつ）美術館の図が名高い——。

有名な場面を描いた絵を見ただけでは、行者が白い道を歩んでいる姿は生きていた時の話か、死んだあとの話かもわからない。ラストシーンを見ただけでは、物語の全体像は理解できない。

生前の世界と死後の世界の間「川」があるという“三途川”は二河譬がもとになっている。（われわれが依りどころにしている『大無量寿経』では「三塗」の川になっている）

この世とあの世を分ける「川」があるという考えは普遍的なもので、ギリシア神話でも、この世とあの世を分けるステュクス・アケロンという川が想定されており、そこにはカロンという渡し守がいることになっている。

三途川の名の由来は、初期には「渡河方法に三種類あったため」であるという。善人は金銀七宝で作られた橋を渡り、軽い罪人は浅瀬を渡り、重い罪人は難所を渡る、とされていた。平安末期以降は全員が渡舟によって渡河するという考え方に変わる。渡船の料金は六文と定められている。

もし六文銭を持っていなかったら、葬頭河婆（そうずかば／葬頭河は三途川の正式名）、別名・奪衣婆（だつえば）が、渡し賃のかわりに死者の衣類をはぎとることになっている。

俳優の勝新太郎が死んだとき、築地別院を会場にして日蓮宗によって葬儀が営まれた。その際、棺桶に六文銭のかわりに6百万円の現金が入れられてそのまま燃やしてしまった。真宗以外の仏教様式の葬儀の際に、六文銭を持たせるという習俗がずっと続いていることがわかる。

余談になるが、ご門主様に導師をお願いして、本願寺で葬儀を行うとしたらいくらかかるかご存じだろうか。

か。答えは200億円である。松下幸之助が死んだとき、本願寺に「隣接する北境内地の取得費用を肩代わりするから幸之助の葬儀を頼みたい」と打診があったが、本願寺は断った。東西の本願寺はお金では動かないという矜持を保ったのである。

『大霊界』を書いた丹波哲郎は、三途川を見たという。おじいちゃんが花畑の向こう側で手招きをしていたという。しかし、こういう世界を浄土だと思ってしまうと大間違いになる。花があるということは、受粉のための虫がいることになる。虫がいればそれを捕食する動物もいることになり、人間もいる。そしてまた好醜、優劣の差別があることになる。大霊界のような話をてがかりにして浄土を理解することはできない。

二河譬の絵を見ているとみずぼらしい死後の世界がイメージされ、われわれの心象風景と重なる。

私（桑門）が座右において愛読している『現代語版・顕浄土真実教行証文類』のp.183に、「ここに一人の人がいて、百千里の遠い道のりを西に向かって行こうとしている」と書いてある。

「百千里を超えて西に向かおうという」という初心がもっともたいせつなのである。“西に向かう”とは、夜寝るときなどに、ふと「なぜ自分は生きているのだろうか。この命はどこからきて、どこへ行くのだろうか」と考えることである。善導は西に向かう気持ちがないと、あとの話

をいくら聞いてもダメだと言い切る。

行者が西に向かって進むと、誰もいない「空廻（くうごう）の沢」に出る。そして旅人が一人と見ると群賊悪獣が襲ってくる。襲うとは刀で切ったり突いたりすることではなく、「西に向かわなくてもいいんだよ。そのまんまでいいんだよ」と、仏と同じ顔をした者が耳元でささやくのである。

人間にとって「私はここにいるんだ」という気持ちをわかってもらいたい、自分を認めてほしいというのが最大の欲望である。そこへ「世を厭うことはない、仏法を求めると必要などない」といわれたらイチコロである。仏と同じ顔をしている者を群賊悪獣と見抜いて歩を進めなければ、迷いの世界に沈むことになる。

二河譬の絵は俯瞰図になっているので釈迦弥陀二尊のすがたが見えるが、空廻（くうごう）の沢にいる旅人には白い道しか見えないのである。

無人空廻（くうごう）の沢とは、末法のことである。法を求める心すらない世界をあらわしている。

『御文章』で蓮如上人は「末代無智の在家止住の男女たらんともがらは」と呼びかけてくださり、「私と一緒に西に向かって行きましょう。この娑婆世界の暗さにきづいてください」と示してくださっている。

お坊さんは教学の勉強をする。難しい言葉も知っている。しかし、電気の起こる理屈をいくら聞いても、スイッチを押さないと電気はつかな

い。暗いから電気をつけるのだが、人は暗さに気づかない。この娑婆世界が明るいと思って、念仏のスイッチを押そうとしないのである。

末法の思想は『法華経』からきている。『法華経』はたくさんの譬喩を使って教えを説く経典だが、とくに有名なものが七譬喩である。七譬喩のうち「火宅喩」が末法をあらわしている。火宅とは火事になって燃えさかる家のことをいう。火宅喩とは、火宅の中で火に焼けるのも知らず無心に遊んでいる子ども達を救い出すために、父親が羊・鹿・牛の3つの車を与えると、家の外に逃れさせ、大白牛車を与え、その中に生きる真実の道を与えるというものである。

道綽は「凡夫は煩惱の火が暖かいと思っている」と喝破する。われわれは火宅がだいすきなのである。善導は「凡夫は煩惱の火が好き」だと断じる。われわれは自分が火宅にいること、無人空廻（くうごう）の沢にあることを知り、西に向かって歩を進めなくてはならない。真宗はしあわせになるための教えである。お聴聞をして、念仏を申して、ほんとうの意味でみんなにしあわせになってもらいたいと思う。

### 《 懇親会 》

例会終了後、ビアローゼン（中区流川町）で懇親会が開かれ、ご講師を含めて30名が参加して、なごやかに会食・歓談した。

**\* 祖霊・怨霊信仰:** 日本古来の霊魂観では、人が死ぬと死者霊、つまり、アラミタマになる。アラミタマは不安定で祟（たた）るおそれがあるが、親族が葬祭儀礼を行うことによってしだいに浄化され、ついにはミタマとなり、個性を失って祖先霊となる。

日本古来の霊魂観は、仏教の伝来とともに、インド、中国等の霊魂観や死後観と習合した。たとえば、中有（ちゅうう／インドの輪廻思想で死後から再生までの状態を中有といい、その期間は四十九日ともいう）の思想はアラミタマに適応され、中陰行事のもととなった。

中国の十王思想や十三仏思想は、年回法要と融合し、三十三回忌ないし五十回忌を弔いあげと称するものもある。子孫がいなくて、アラミタマに対する儀礼が行われない霊魂、無縁霊は、しだいにインド以来の餓鬼と結合し、餓鬼供養の仏教習俗へと発展した。

死者を“ほとけ”という習俗は、仏教と日本の霊魂観の融合によるものという。ほとけは仏陀であり、悟った人のことであるから、死者をほとけというのは教理的には誤った用法である。しかし、仏教では万人がほとけになると説くし、成仏を理想とする。このほとけはいつしかアラミタマと同一視された形跡がある。

日本の葬祭儀礼は、中国における僧院の亡僧（修行中になくなった僧）

の葬儀法をモデルにしているが、ここでは亡僧を覚霊（悟った霊）、つまりほとけとよんで、成仏以前になくなったことを本人とともに悲しみ、同時にその死後を飾る考え方をしている。したがって、仏教の立場からは、死者をほとけとよぶことは死者への思いやりという面がある。同時に、日本古来の観念からいえば、ほとけであるアラミタマは中陰の法事を行うことによって祖霊となるので、まったく矛盾はない。その祖霊も後にはほとけといわれるようになったらしい。

この解釈が正しければ、死者をほとけとよぶことは、教理的には誤りであるが、民間信仰と仏教教理をダブらせることによって、仏教側が伝統的な儀礼を仏教的観念で包みこんで仏教の儀礼としたのであり、仏教が日本に定着するのを助けた大きな要因といつてよい。

**\* 年忌・遠忌:** 人が死んで後、次の生を受けるまでの期間を中陰または中有といい、四十九日を限度とすることは『俱舍論』にも出ている。しかし、7日ごとの四十九日と百ヶ日、一周忌、三回忌の合計10回の法事を死者の冥福を祈るために行う十仏事は、中国の十王思想（仏説地藏菩薩發心因縁十王経／偽経）の影響である。

十王とは死者の罪業を裁く10人の王のことで、王の前で死者は生前の罪業が裁かれ、悪い行為をしている

ことがわかれば烈しい苦しみを受けなければならない。

- ・初七日＝秦広王（しんこうおう）
- ・二七日＝初江王（しょこうおう）
- ・三七日＝宋帝王（そうたいおう）
- ・四七日＝伍官王（ごかんおう）
- ・五七日＝閻魔王（えんまおう）
- ・六七日＝変成王（へんじょうおう）
- ・七七日（四十九日）＝太山王（たいざんおう・太山府君）
- ・百ヶ日＝平等王（びょうどうおう）
- ・一周忌＝都市王（としおう）
- ・三回忌＝五道転輪王（ごどうてんりんおう）

死者がその苦しみを受けないように、遺された家族は法事を行って死者のかわりに善業を積むことによって、死者の罪業を消滅させようとするのである。

また、この10回の法事に七回忌、十三回忌、三十三回忌を加えて「十三仏事」ということもあるが、これは日本において行われたものである。十三仏とは、中陰および年忌に法事を行うとき、本尊とする13体の仏、菩薩をいう。

- ・初七日＝不動秦広王（ふどう・しんこうおう）
- ・二七日＝釈迦初江王（しゃか・しょこうおう）
- ・三七日＝文殊宋帝王（もんじゅ・そうたいおう）
- ・四七日＝普賢伍官王（ふげん・ごかんおう）
- ・五七日＝地藏閻魔王（じぞう・えんまおう）

- ・六七日＝弥勒変成王（みろく・へんじょうおう）
- ・七七日（四十九日）＝薬師太山王（やくし・たいざんおう）
- ・百ヶ日＝観音平等王（かんのん・びょうどうおう）
- ・一周忌＝勢至都市王（せいし・としおう）
- ・三回忌＝弥陀五道転輪王（みだ・ごどうてんりんおう）

このように中国の十王の上に仏、菩薩をつけて仏教色を強くして、

- ・七回忌は阿闍蓮上王（あしゆく・れんじょうおう）
- ・十三回忌は大日抜苦王（だいにち・ばっくおう）、
- ・三十三回忌は虚空蔵慈恩王（こくうぞう・じおんおう）

の計13の仏、菩薩を本尊として法事を執り行うのである。

- ・七回忌は、十二支の半分を終わって初めの年に当たるからとも、初七日、二七日などの「七」の数を用いることになったともいう。
- ・十三回忌は、十二支が終わって初めの年に当たる。
- ・十七回忌は、中国の皇帝の故事に由来するという。
- ・二十五回忌は、十二支が2度終わって、初めての年に当たる。
- ・三十三回忌は、十二支が3度終わって、もとの支の年を迎えて行くべきところを引き上げたものらしい。
- ・五十回忌は、十二支が4度終わり、もとの支の年を迎えて49年目に行

うものとされている。

これらのうち、七回忌は室町時代に始まり、十三回忌は奈良時代に、十七回忌と二十五回忌は室町時代の末に、三十三回忌は鎌倉時代の末に始まったという。

これらの年忌が仏教に由来するものではないことを明らかにしたのは高野山の名僧、明遍（1142～1224）であったという。

平家が盛んであったころ、桜町中納言成範卿（なりのり）が、父親の十三回忌を営むことを考え、弟の明遍に通知したところ、弟の返事には次のように書いてあった。

「高野山にこもって、一切経（仏教のすべての経典や論書）を調べたが、3年、7年ないし、13年、33年などの

遠忌を弔うことは経典のどこにも出ていない。だから、仏教で父の遠忌を弔う必要はない。しかし、儒教には遠忌を祭ることがある。去る者は日々に遠く、これをしのぶ心は少ない。遠忌を行って父をしのぶのであれば、儒教によって弔ってください」

この手紙のなかにも出ているように、昔は13回忌なども死去の日から遠くへだたったものであるから、遠忌とよんでいた。しかし後には、五十回忌以後の年忌を遠忌というようにならった。ただし、宗派のなかには、宗を開いた宗祖ならびに、宗派に大きな貢献をした高僧の年忌を御遠忌（ごおんき）、その他は回忌と称して区別するものもある。

### 【 組仏壮・9月例会出席者 】（寺族・順不同）

中川 英 尚（浄光寺）	井上 晃 陽（正光寺）	武田 勝 道（教西寺）
尼子 成 爾（教伝寺）	友国 義 信（善徳寺）	季平 弘 順（専光寺）
永光 至 邦（永光寺）	松尾 淳 成（専立寺）	